リア充は爆発しろ、ガチで！2
暖かくなってきた連休の過ごし方
駅前で待ち合わせて女子会♡
休日特集
SweetsBerry

リア充は爆発しろ、ガチで！2

天姫あめ

「ふええ？　あれ……ハヤハヤ？　え？　鼻を抑えてどうしたの？」
「どっかの石頭が頭突きしてきたからだろっ！」
「それって私のこと？」
「お前以外この場にいるのかよ！　ホラーかよ！」
黄金騎士を今すぐ呼んでくるべき。
そんな風に馬鹿なことを考えて痛みを和らげていると、
「てか、何で背後に立ってたわけ？　はっ！　もしかして私の守護霊にでも志願したいっていうアピール？」
「お断りします」
「そうよねー。ハヤハヤが守護霊だと頼りないしー」
「んだと……役に立つぞ。危険から超守るし」
「だってさー、ラノベの新刊が出たら私のことほっぽり出して買いにいきそうじゃん」
「……それは否定できんな」
守護霊さま（役立たず）である。
というか。
「守護霊って死んでからなるもんだろ？　痛がってる相手に幽霊扱いって酷くねーか」
「んー、でもさー、ハヤハヤって空気みたいな存在だから幽霊みたいなもんじゃない？」

「誰が空気じゃ！　それに普通の人は、ゆうれいなんか見えない！」
でも、同級生に空気扱いされている俺の明るい未来はもっと見えない。皆、空気に優しくしろよな。そういう社会の風潮だろうがよ！
「ハヤハヤ？　鼻を抑えていた時よりも、目が潤んでない？」
「ほ、埃が目に入ったんだよ！　というか、空気入れ替えね？　この部屋、埃っぽいぞ」
淀んだ空気と気持ちを入れ替えよう。
緩やかな動きで、窓に！　窓に！
「……運動部の連中は、頑張ってるな」
窓を開けると、グラウンドから活気に溢れた声が聞こえてきて、懐かしさが湧き上がる。
……あの頃から、背は伸びたけれど、心は成長していないと……ふと、そう思った。いつまでも、こうして特等席から眺めているだけってのが、俺らしい。
あと、先ほどから忍び寄ってくる気配は気のせいではないらしい。
勢いよく振り返ると、
「あ……」
気まずそうな表情を浮かべる栞が立っていた。
「俺の後ろに立つな。命が惜しければ」
「たたたたたたたたたたたたた立ってないし！」

ケンシロウ、うぬの言い訳はその程度か？
「私もグラウンドを見ようとしていただけだし！　誰かさんみたいに背後から襲おうとか思ってないし！」
「おい、こら。人聞きの悪い表現はやめろ。奇襲といえ、奇襲と。俺の得意分野だぞ」
奇襲は劣勢を覆す上で最強の戦法。まさしく、人生での負けが決まりそうな非リア充にお似合いだと思う。
「キ、キスって……な、ななな、いきなり何言ってるのよ、馬鹿！　何が得意分野よっ！」
「？　顔を真っ赤にして、いきなりどうした」
「うるさいっ！　近寄らないでっ！」
栞が後ずさった。
どうやら奇襲という計略を見破られて、狼狽えているらしい。いいぞいいぞ！　もっと俺の才を恐れるがよい！
そんな風にほくそ笑んでいると、栞の怯えた表情を、前にもどこかで見た気がしてくる。
「あー」
思い出した。漫研部の連中と死闘を繰り広げた、あの日だ。
記憶と同じく、久しぶりに人を殴った感触も蘇った。
「いきなり発声練習をしてどうしたの？」

「ちげーよ。思い出してたんだよ」
「思い出すって？」
「栞とこうしてゆっくり話すのっていつ以来だったかなってさ」
「ふえ？　んー、あー……ゲーセンぶり？　私、４月最後の部活は、体調が悪くてさっさと帰っちゃったし」
「だったな。おかげで、どっかの毒吐き女とふたりきりですげぇ気まずかったわ」
「……ふーん」
　先ほどまで頼りなかった栞の瞳に、いきなり力が宿る。
「おい、ガンを飛ばしてくるな」
「別に？　飛ばしてないけど」
「いや、明らかに睨んでるだろ」
「睨んでない！　ミスドでどのドーナツを買おうか悩んでいるような嬉々とした表情よ」
「なるほど。お前は穴が空くまで見つめてからドーナツを買うタイプなんだな」
「ドーナツは元々、穴が空いてるでしょー」
「誰うま」
　山田君がここにいるなら、座布団を一枚あげたいレベル。
　しかし、積み重なっていくのは座布団だけじゃない。ふたりで過ごす時間もその一つ。

……そろそろ、他の連中も部室にやってくるだろう。
　そうなる前に、釘を刺しておきたいことがある。
「あのさ、栞」
「何？」
「……あの日の、その……不良を撃退したことだけど、内緒にしておいてくれないか？」
「ん？　内緒に？」
「ああ、あんまり知られたくないんだよ」
　喧嘩が強いってのは、不良だとか、暴力男だとか、世間一般的によいイメージを持たれにくい。
　もしも、校内で「アイツは不良だ」なんて噂がひとり歩きしてしまったら、リア充から遠ざかってしまう。
　遠距離になればなるほど想いが成就するのは難しいものだ。恋愛かよ。よく駅のホームで抱き合っているカップルを見かけるけど爆発しろ！
　いつもの調子で心の中でテロを行っていると、
「うん、わかった」
　栞が大きく頷いた。
「あの日あったことは私とハヤハヤだけの秘密。誰にも言わない」

笑い混じりに呟く彼女の声は、どこか哀愁が漂っている。夕焼けを浴びているせいだろうか。
「じゃ、指切りしよ」
「え？」
「ほら、ボーッとしてないで」
催促するように小指が突き出される。
白くて細い小指は、夕焼け色に染まっており、とても輝いて見えた。
「……まさか、友達がいないから指切りの仕方を知らないとか？」
「ば、馬鹿にするんじゃねー！　さすがに、知ってる！」
子供の頃にやったことくらいある。
だから、ゆっくりと小指に小指を重ねる。
それだけで、不思議と心が温まっていく。
……栞の、わずかな体温が伝わってきているせいだろう。というか、女子の指ってこんなに柔らかいものなの？　これならたしかに、世の男子は指先一つでダウンさー。ホワタァ！
そうやって気恥ずかしさを誤魔化していると、
「ゆーびきった」
お決まりの台詞と一緒に、栞が小指を放す。
もう繋がっていないはずなのに、どこか繋がっているような感覚。

「えへへ」
「何だよ、変な笑い声あげて」
「さーねー」
意味深な笑い声だけを残して、栞は席に戻ってしまった。
……これだから指が柔らかい生き物の思考回路はよーわからん。ホワタァ！
わからないことを深く考えるのはやめよう。答えがでない問題に時間を費やすよりも、答えがわかる問題から解くべし。テストの鉄則だよな。
テストという単語で嫌なことを思い出した。七月には期末テストが待ち受けている。
……だが、勉強する気はこれっぽっちもない。勉強しておいて損はないのはわかっているし、学生の本分が何なのかも理解している。
でも、嫌いな物は仕方がないよね。学校で習う事って、生きてく上で不必要なものが多すぎる。だからやる気が湧きません。
それに、劣等生や落第忍者が活躍することもある。いつから優等生が主役だと錯覚していた？
そんな風に、迫ってくる現実から逃げていると、
「すまん。遅れたな」
ドアが開く音と同時に、凛とした声が部室内に響き渡った。
どうやら新たな非リア充がやってきたらしい。

「いちばん最後だぞ。ノロマな奴だな」
開かれたドアの向こうに佇む人物へ言葉を投げ返す。
毒を含んだ言い方なのは、普段のお返しだったが、
「あ？」
やられたらやりかえす主義のコイツには下策であった。
毒蛇が牙を剥き出しにして迫ってくるほうがまだ可愛らしく思えるほどの、凶悪なる眼差し。
色素の薄い髪の毛が、夕焼けを照り返して輝いている。その輝きは、教室で見た学生達のとは違い、どことなく神々しい。
畏怖と威光。
我らが薔薇組の部長・吉川弓那（きっかわゆみな）にピッタリな言葉だと思う。
「遅刻してきたのに、パンを咥えてないとか……弓那はセンスないわねー」
「……ふん、そんなテンプレみたいな発想しかでてこないとは、さすがはテンプレのデパートだな」
「なっ、どういうことよ！」
「巨乳で金髪ツインテールでツンデレでお兄ちゃんのことが大好き。これほどテンプレという言葉がしっくりくる奴はいないと思うぞ？」
巨乳が真っ先にでてきたのは、貧乳特有の嫉妬からだろうか。

「……おい、隼人。今、私のことを貧乳の妬み乙とか思っただろ？」
「お、思ってねーよ！」
「言っておくが、貧乳はステータスだ！　希少価値だ！」
弓那が誇らしげに言った。
「開き直り乙」
「あ？」
睨まないでくださいよおおおおおおおおおおおお！
四月から五月になったというのに、眼力は変わっていないらしい。むしろ、増した気がする。太陽の日射しかよ。
「ところで、弓那。手に持ってるその封筒は何？」
栞が不思議そうに声をあげた。
「ふふ、良く気づいたな！　これこそ、私が遅れてきた理由だ！」
大げさなリアクションで封筒を見せてくる弓那。
自信たっぷりな見せ方は、印籠を出すときの黄門様ご一行にも負けないレベル。平伏はしないけどな。
「その封筒が、どうしたんだよ？」
「ふん、この分厚さが目に入らないのか？」

「分厚さ……」
言われてみれば、誰かさんの胸みたいに薄くはない。
「ふふ、この封筒の中には！　なんと、」
「待ちこがれた、部費が入っている！」
弓那の声を遮ったのは、同級生の女子達では出せそうにない艶めかしい声。
そんな声を出すことができるのは、あの人しかいない。
「いつもニコニコお金のお傍に這い寄る顧問、吉見英理（よしみえり）ですっ♪」
「先生、コォモンってそれっぽく発言したってダメですよ！」
「ほう、担任に文句を言うとは、でかくなったな小僧」
ＧＷ期間で遠目でわかるくらい背が伸びていたら、ちょっとしたホラーである。黄金騎士は仕事をするべき。
しかし、本当に仕事をするべきは、吉見先生だと思う。
薔薇組の顧問であるにも関わらず、たまにしか部活動に顔を出さない。顔を出したかと思えば、煙草を吸うだけだ。サボリ癖さえなければ、美人だし、スタイルも良いので結婚相手なんてすぐに見つかると思うけどなぁ……。
そんな風に先生を眺めていると、
「ふふふへへへへへへ、金だ！　金！　金金金金金金金金！」

円（つぶ）らな瞳を￥マークに輝かせていた。
「さぁ、吉川よ。大金を持っていたら危ないから、先生に預けろ」
お年玉をもらった子供に親が言う台詞っぽいことを口走った。
「先生に預けるほうが危ないですっ！」
弓那が部費を握りしめて、視線で牽制する。
だが。
「退かぬ！　媚びぬ！　省みぬ！」
先生は諦める素振りを見せるどころか、さらに前進を続ける。
交錯する視線がぶつかり合い、宙で火花を散らす。一触即発。ラノベ風に例えると、俺の担任と幼馴染みが修羅場過ぎる！
……って、弓那みたいな毒舌女が幼馴染みだったらガチで人生詰んでる。オワタァ！
ともあれ。
こうやって馬鹿なことを考えながら戦いの様子を見物するのも楽しいのだが、悲しいことに時間というのは有限である。
あまりダラダラしていたら帰宅時間が遅くなりそうな気がするので、どうやって戦いに終止符を打たせようかと考えていると、
「そこで睨み合ってても埒があかないし、とりあえず中に入ったら？」

VA文庫

VA文庫
リア充は爆発しろ、ガチで！2

2012年 7月28日　初版第1刷 発行

■著　　者　　天姫あめ
■イラスト　　nyanya
■SDキャラ　　みうらさぶろう
■製　　作　　株式会社パラダイム

発行人：馬場隆博
発行元：株式会社ビジュアルアーツ
〒531-0073
大阪府大阪市北区本庄西2-12-16
ＶＡ第一ビル
TEL 06-6377-3388

印 刷 所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製･複写･放送･データ配信などをすることは、
かたくお断りいたします。
落丁･乱丁はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。
©AME TENKI ©nyanya
Printed in Japan 2012　　VA019

君と歩んで恋色ミッション
未来から来た彼女は現代でお仕事を学ぶそうです！
藍上ゆう
イラスト／如月桐葉
VA文庫17
藍上ゆう 著
如月桐葉 画
定価 650円(税込)
引きこもりの歩人の部屋に、突然現れた未来少女マナ。管理者となるための、研修授業なだと言うが、そんな彼女がまっさきに始めたのは、なぜかメイドさんだった。ワーカーリボンの力でいろんな制服を身につける、マナとの体験授業が始まった！
未来の彼女は、ご奉仕だいすき♥
好評発売中